

オプション教材ペンペングサ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

2.

3.

4.

5.

教師の指示もなしに、日直が号令をかけたり、朝会が行われたり……。だが、こうした日本の小学校の情景を見て、ローレンス校の教師たちが、日本の児童たちが教師の指示もなくまったく彼ら独自の判断によって動いているのだと考えたならば、早合点である。確かに、日直は自分の判断に基づき、「今日はここまで」というような教師の言葉を手ばかりとしつつ、授業の終わりを察して号令をかける。しかし、最終的権限は教師にある。これは、日直が時として「もう号令をかけてもよろしいでしょうか」と教師の顔をうかがったり、教師が日直に号令のやり直しをさせたり、日直が号令をかけやすいように、「静かに」とクラスを注意をすることからもうかがうことができる。

日直や係が中心になって行う学級の話し合いなどでも、「困った」方向に向かっていると考えた場合には、教師は方向づけをする。たとえば、児童にお互いのよい点と悪い点を話し合つて反省の材料にしてもらおうとするようなときに、クラスの嫌われ者が皆からの集中攻撃にあつて、誰も助けられないような場合は、教師は、その子供のよいと思われる点を皆に思いださせることによって、個人攻撃をやわらげようとするかもしれない。

アメリカ人は、時として、日本の会社などでの小集団活動は、権力を握る人々が背後から操る、従業員の統制手段に過ぎないという理解を示す。集団や他者から自立した「個」を強調し、権力に対する警戒もことさら強いアメリカ人からすると、日本の小学校での小集団活動も、このように映るかもしれない。

確かに、日本の学校の小集団は、権力に対抗するために児童によって結成されたのではなく、反権威主義的な色彩を持つものでもない。児童の管理に利用されている面もあると思われる。だが、このような側面のみを強調したならば、日本の教師は心外に思うに違いない。集団自治を目指す以上、彼らには、児童の集団自治活動になるべく介入すまいという心理的規制が働いている。その意味では、直接的に児童に指示を下すことをためらう必要のないアメリカの教師以上に、行動を規制されていると感じる面さえあるかもしれない。

こうした日本の学校の小集団活動の特徴は次のように考えられ

る。

- (1) 目標、手順、役割が明確である
- (2) 活動がルーティン化されている

- (3) 児童相互の集団規制を利用している

朝の会を例にとると、どのようなことが、いかに行われるべきか、その中で参加者の役割は何かを示され、それがルーティン化されるのである。つまり、「型」が示されるのである。活動内容、手順、役割がはつきりしているため、従わない者に対しては児童相互の規制が働きやすく、実際にそのような行動が奨励されている。ルーティン化は教師の側から見ると、期待とは大きく外れた結果が出ることを未然に防ぐ役目があると言えよう。こうして、日本の教師は、絶えず指示をあたえなくとも、時として自分が不在でも、活動がいつも通り滞りなく行われることを期待できるわけである。

簡略化すれば、アメリカの小学校では教師が個人リーダーとして、自ら指示を下して児童を率いていく仕組みであるのに対し、日本では教師が集団による役割分担と児童相互の規制を利用しつつ、直接統治と間接統治とを併用する形になっている。一定期間固定された班などの小集団の中で児童相互の規制が奨励され、教師は背後からそれを誘導するのである。

一方、授業外の小集団活動が発達していないアメリカの場合、児童は担当教師を初めとする教職員の、「上から下」への指示に直接、従う形となる。

(恒吉僚子『人間形成の日米比較』より)



「まち」とは、自分たちが住み、暮らし、働き、学び、遊び、楽しむための共同の空間というハードと、その人々の生活、それを動かすシクミやルールというソフトを含めた全体をいう。ヨーロッパ中世都市は、ブローニッツによると一年に一度全員が集まって宣誓を行う宣誓共同体であったという。そういう儀式を実際に行ったかどうかは別として、大勢の異なる人々が、自分たちでルールを定めて、それに従って協働して暮らす社会とその器である。

「まち」は自然にできるものではない。多くの人が集まり、その意思の集積としてつくられる。だが、日本では、東京始め巨大な都市が形成されてきたが、「まち」をつくるという意識がないままに、それぞれの営みをしてきた結果が、現在の街の姿になっている。

住民は「まち」をつくるという意識をもっていただろうか。無秩序に都市が膨張していく有様を、「自然発生のまち」と表現するが、自然現象として発生したのではない。ここで言う「自然」とは比喩的な表現で、実際には一つ一つ人間の意志による行動の集積だが、「まち」をつくらうという意思も意識もないために、あたかも自然にでき上がったように見えることを言っている。その結果は、とても美しいとは言えない姿になってしまった。全体はとりとめなく乱雑でまとまりがなく、なくてもよいものが至る所に散乱し、個性を失っている。

一個一個の建築や構造物では、それなりに魅力的なものも造られている。新たに開発された地区には、広場や水辺や緑もあって、けっこう整った姿もあるのだが、都市全体としてみると、互いのつながりもなくバラバラだ。

なぜ「まち」が美しくなくなつたのか。日本人に美的感覚がないのだろうか。そんなことはない。美的センスや造形能力では、世界に通用する優れた個性を発揮してきた。問題は、「まち」という意識がないために、そのセンスや能力が「まち」に発揮されてこなかったからだ。多くの人々が「まち」をつくることに関わっているはずなのに、個人なら自分の家だけを造ると思っている。企業ならいかにして自社の利益を上げるかを考えて建築物を建て、広告物を作る。優良な企業ならば、目の前の利益だけでなく、長期的な利益や企業イメージも考えるはずだが、自分たちも「まち」をつくっていない。

一員だという意識は乏しいままだった。これは教育面でもいえる。子供のときから環境や「まち」についてほとんど学習してこない。現在の「まち」のオーナーは市民だし、それを美しくするのも、使いこなすのも市民のはずなのに、自分本位の世界に閉じこもらせてしまった。

また専門の建築教育では、白図の上の自由に設計する課題を与え、周囲との関係を考えることを教えていない。単体のデザイン能力だけが評価されてきた。あたりかまわず与えられた自分の敷地内で思い切りデザインすればよい。そうした考えで育った専門家では、美しい「まち」ができるはずはない。道路や河川を造る土木技師も、自分の所管する構造物の設計・施工をするだけで「まち」という全体を考えない。

さらに困ったことには、都市全体を考える立場にあるはずの国や自治体などの公的機関も、目的別に組織され、「まち」をつくる意識がない。タテワリ組織ごとに建築を造り、河川を整備し、道路や橋を建造する。ヨコワリの「まち」全体を意識するよりも、まず自分たちの縄張りを拡大し、そのなかで専門領域の中に埋没してきた。

都市の景観は、ひとつずつの行動が積み上がって形成される。一つの建築物や構造物を設置しようとするときに、その周辺や、もう少し広い地域への関心をもっていれば、全体としての景観は整ったものになるだろう。だが実態は、政府機関までが自己中心に動く。政府も自治体も企業も市民も、全員あげて「まち」を考える発想も余裕もなく行動してきた集積が現在の都市の景観である。

（田村明『まちづくりと景観』より）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

かつて、「若者の活字離れ」と言われた。しかしこれだとあまりにも不正確だ。これは、「かつて本を読んでいた若者の活字離れ」で、「大学生の活字離れ」というものでしかない。その昔、世の中には大学生以外の若者だとして大勢いた。初めから本なんか読まないでいた「若者」だとしてゴマンといたのだ。「今の若者は難解な思想書など読まない」とこの二十年ばかり言われ続けて、しかしその一方で、平気で難解な思想書を読む若者だとして増え続けてはいるのだ。もつと物事を正確に言っただけのこと——「今の若者は、私達が読んだような思想書は読まずに、別の思想書を読んでいる」と、それだけのことだった。本を読むやつはいっただけで読む。本を読まない人間は、いつの時代にもいる。そしてこの近代という期間の日本は、その両者に対して、「本を読むべきだ。本を読むということが自身の思考力を身につけることなのだ。人は言葉で思考し、その思考を言葉によって整理する。人にとって思考と認識とは、人である限り続く義務であり権利であるはずのもので、そのことの結果によって得るものが「自由」と呼ばれるものだ」と、知性なるもの言ひ続けてきた時代だ。その、強制力にも似た声があればこそ、ともすれば怠惰になりがちな若者達は、かろうじて本を読み続け、思考という細かい力を持続させて来たのだ。その努力を捨てて、活字の側が「活字離れ」などという安易なレッテル貼りで、啓蒙という義務を怠つてよい訳がない。にもかかわらず、活字はそれを怠つたのだ。

世の中には、大学なるものと無縁のままの人間がいくらでもいる。がしかし、それらの人間が知性と無縁である訳ではない。がしかし、大学に代表されるような知性は、そうした「異質な知性」の存在を拾い上げられなかった。世の中には、文章以外の表現はいくらでもある。絵という視覚表現は、文字以上に古い人間の表現手段だ。がしかし、「これをこう読め」と活字なるものに命令されることに馴れてしまった活字人間は、その「どう読み取ってもいいよ」と言っている視覚表現の読み取りが下手だった。まるで「役所の書式に合致していないのでこれは受け付けることができません」と言う頑なな役人のように、自分達とは系統の違う文化の読み取りを、活字文化は拒絶し続けて来た。すべての文化には、それが文化であるような構造が隠されている

——だから、読み取りという作業が必須になる。その構造を自身の頭で読むということが、そんなに難しいことだろうか？ 偏見のない人間は、未知の人間であつても、「この自分の目の前にいる人間もやはり人間なのだから、必ずコミュニケーションを成り立たせる道はあるはずだ」と考えるものだ。人は、現実生活の中で、無意識の内に自分とは異なる異文化——即ち「他者」との接点を見出そうとしているもののな。

活字離れというのは、活字文化という閉鎖的なムラ社会に起こった過疎化現象だ。「ここにおいても自分達の生活は成り立たない、ここにおいても自分のあり方というものは理解されない」と思った若者達は、トカイという雑駁な泥沼に消えて、もう山間のムラには帰つて来ない。次代の後継者はムラを去つて、ムラはさびれる。さびれてしまったことを理解しない閉鎖的なムラの住人達は、ただ「寂しくなつた」という愚痴ばかり繰り返して、そんな愚痴が、人をそのムラから追い払う元凶の一つでもあることに気づかない。ムラはさびれ、そのムラを発展させてムラ社会という閉鎖性を解き放つはずだった後継者達は、焦点を欠いたトカイの中で無意味な浪費を繰り返す。退廃の元凶はどこにあるのかと言われたら、私には、「ムラにある」としか言えない。活字の責任というものは、想像を絶して重いのだ。

(橋本治『浮上せよと活字は言う』より)



アイヌの世界観において驚くべきことは、動物も植物も天の世界ですべて人間の形をして、家族生活を営んでいて考えられていることである。その天の世界では、われわれと同じ人間である動物や植物がこの世界に現れるときには、ハヨクベ即ち仮装をつけて現れるというのである。何のために仮装をつけて現れるのか。それは人間の世界にミヤング即ち土産を持ったマラプト即ち客人として訪れるためである。つまり、アイヌにとつて、熊も木もすべて人間と同じものであるが、彼らはその身をわれわれに提供するためにこの世に仮装をつけて出現するというわけである。

アイヌの社会で最も重要な祭りであるイヨマンテ、即ち熊送りの儀式は、このような客人の携えた土産をいただく、その代わりその霊を無事天に送り届ける宗教的儀式なのである。アイヌは子熊が捕れると、それを大事に育て、その身が美味しくなる秋頃に子熊を殺す。この殺し方もまたすべて決められた礼に従って行わねばならぬが、この儀式の中心はやはり殺した熊の霊を天に送ることにある。それがイヨマンテ、イ（それ）をオマンテ（送る）儀式なのである。殺された熊の頭を祭壇に祀り、そこに日本のゴヘイにあたるイノウ即ちケズリカケを立て、そこに、熊に人間からのミヤングとしてドングリや穀物や魚や酒を供え、それを持たして、おそらく鳥のイメージであるにちがいないイノウに乗せて熊の霊を天に送るのである。こうして丁重にもてなされた熊が人間にもらった土産を天に持ち帰ると、その土産は数十倍になり、それをもって宴会を開くと天にいる熊たちは寄つてきて、天に帰った熊から、人間に大切にもてなされ無事天に送り返された話を聞き、それでは自分も行つてみようと思うのである。そして翌年は多くの熊が生まれて、豊猟であるということになる。

熊ばかりか、すべての動物、草木すらここでは神であり、天の世界では人間の形をとって生活しているのである。それゆえすべての動物、特に人間によって殺され食用にされるものは人間と同じく丁重に葬られ、無事に天へ送り届けられなければならないのであ

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

る。このような世界観をわれわれはどのように考えたらいのであろうか。もとよりこれらの思想が全体としてそのまま真理であると私は主張しようとは思わない。もしも熊に「あなたは土産を持ってこの世界に訪れた客人なのですか」と尋ねたら、熊はきつと「ノー」と答えるにちがいない。それはあまりに人間の勝手な考え方だと熊は抗議するにちがいないが、しかし私はキリスト教の考える、神は山や川やすべての動物をこしらえた後に、最後に人間をつくり、人間に神と同じ理性を与えた、それゆえ、人間はすべての動物を支配する権利を持つ、という思想よりはるかに勝手な考え方ではないと思う。なぜなら、人間がすべての動物を支配し、殺害することのできる権利を神によつて与えられているというのでは、人間は動物を殺してもいささかも良心の呵責を感じないであろう。この考え方は熊は本来、人間と同じものであり、したがってわれわれはこの客人の好意に従つて客人を殺した場合、必ずその霊を天に送らねばならないという考え方はかなりな差がある。前者は本質的に人間と動物の差別の上に立つ世界観であるが、後者は人間と動物とを本来同一とみる世界観なのである。

人類は長い狩猟採集生活の末に、動物の殺害を合理化する哲学を考えたにちがいないのである。おそらく動物の殺害は不快感を伴ったにちがいない。その不快感を除去し、動物の殺害と食肉を合理化する哲学として、彼らは、動物は土産を持つて人間社会に現れた客人であるという神話を考えたのであろう。このような神話は動物の殺害や植物の採伐を最小限度にとどめることになる。彼らは動物に「私が生きていくためには、あなたの身が必要なのです。どうかあなたの命を下さい」と言わないと、動物を殺すことができないのである。アイヌ語で「ありがたう」という言葉は、「ヤイライゲ」というが、「ヤイライゲ」というのは、私を殺してくれという意味である。この狩猟採集時代の厳しい自然環境のなかでの最も強い感謝の表現は、私を殺して私の肉を食ってくれという言葉なのである。（梅原猛『伝統と創造』による）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34



人間社会は「同じ」を繰り返すことで「進歩」してきた。「同じ」というのはたらしきの典型が言葉である。日本のなかに違う言葉話す人たちがいると、やがて「同化」される。それが方言やアイヌ語に起こったことである。すでにおびたしい数の言語が減じた。いまは英語が国際語だといわれている。インターネットの普及によって英語はさらに広がり、中国語はやがて北京語に統一されていくのではないかという予測もある。中国語の場合、ケータイへの入力はアルファベツトつまり発音に依存し、それなら発音が「正しく」ないと、目的の漢字が出てこないからである。そのうち日本語はかつてのアイヌ語になるかもしれない。それが「進歩」なのである。そこでは皆が「同じ」言葉を話す。その反動で、個性、個性とわめきだすのであろう。挙句の果てに、心に個性があるなどと思ってしまう。個性をいうなら、多様性というべきである。個々の独自性がいちばん大切なのではない。個々の独自性は、それ自体が減じたら、それまでである。なにしろ諸行は無常なんだから。多様性とは、さまざまな「違ったもの」が調和的に存在する、存在できる、という状態である。それを私はシステムと呼ぶ。生態系Ⅱエコシステムは生物多様性を維持する。なぜ世界的にその「違ったもの」が危険に陥っているか、すでにおわかりだと思う。「同じ」「同じ」をひたすら繰り返すだけでなく、それを「当然として強制する」世界では、多様性は失われていく。

「違い」は感覚世界に由来する。それなら感覚世界をたえず「脳裏に存在させなければならない」。それぞれ違ったものこそが、真の意味での「現実」である。現実には人によって違う。一言で表わすことができる。一言でいうためには「同じ」にしようしかない。だからたとえば「なにごとアツラーの思し召し」ということになる。

「同じ」を繰り返す意識が、その意味での多彩な現実を嫌うことは、むしろ当然であろう。現実Ⅱ感覚世界を、意識はできるだけ「同じ」に変えていく。

「そのほうが便利だから、そのほうが楽だから」と人々はいう。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

環境省がいくら頑張っても、多様性の説明がむずかしいわけである。説明するほうだって、現代人であり、官僚である。そもそ言葉にすれば、五百万種は超えるという昆虫が「虫」の一言となり、十億を超える人たちがただの「中国人」になる。官僚なら言葉つまり情報を扱うしかなく、言葉や情報はひたすら同一性の上に成立する。だからこそ私は、

「言葉は感覚世界と概念世界をつなぐだろうが」とわざわざいわなければならないのである。言葉こそが「同じ」と「違う」の間で、微妙な釣り合いを保つ。そこを「怠けたら」、世界はひたすら同一化する。

たとえばお役所なら、「数字なら扱うが、実体は扱わない」。数字にすれば、十人の人は要するに十である。個別の実体としてみれば、十人の人だけでも、やたらに面倒なものだというしかない。だから、

「そんなややこしいものなんか扱ったら、仕事にならない」

「規則は規則だろ」

「そんなことはできません」

お役所はたえずそう繰り返す。ついには、

「本日の交通事故、死者一名」

となる。感覚世界で、それこそ唯一無二の存在である、ある人が失われても、意識の世界はそれを「一名」で済ませる。それで「人命を尊重せよ」と、お題目をいう。人命一般というものが、この世にあるのか。

とはいえ、人はその二つの世界に住むしかない。現に住んでいるからである。感覚を消すことも、意識を消すこともできない。それなら「同じ」を繰り返して階層をつくる一神教の世界に対して、「違う」感覚世界と「同じ」概念世界を往復するだけで、「同じ」という世界を「上に上ろうとしない」日本人は、珍しい存在ではないのか。そうだからこそ、逆に多様性の維持に関して、利点を持ち、持ってきたはずである。

(養老孟司『無思想の発見』による)

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34



デジカメ→パソコンという世界には、選択肢が網の目のように広がっている。オンとオフの選択肢からはじまったのがコンピュータ世界だから、どこまで行っても選択肢である。毎日毎日選択肢しないと前へ進めない。それが辛い。選択肢なんだから自由にできていいじゃないか、というが、いつの間にか選択肢させられているわけである。

自由な表現、というのも最近は嫌な言葉だ。もちろん理念の上で間違っていない。でもいまは自由な表現といったとたんに嫌で、これは何故だろうか。やはり言葉のもつ体臭のせいだろうか。体臭はあるくせに、言葉に真実味がない。公的な、横滑りの感触だけがある。

選択肢、という言葉は多様性のシンボルみたいに使われていて、その勘違いが嫌なのである。

選択肢するというのは、とりあえずは自由なおこないである。自由であるのは、自分にとっては心地よいことのはずである。でも選択肢を迫られるのは、辛いことだ。常時選択肢しないと進めない世の中は、自由どころか地獄である。ぼくは社長になりたくない。県知事も王様も回避したい。

選択肢とか自由な表現が辛いのは、自分という位置の束縛が出てくるからである。自由による束縛といってもいい。いまの子供たちは、自由な表現というものを強要されて、ずいぶん辛い思いをしているのではないか。表現したいことなんて何もなくても、とにかく自由にしたい見せないといけない。それよりもむしろ固苦しい習いごとを押しつけられて、そのことに抵抗を感じている方がよほどネイティブの自由がふくらんでくるのに。

デジカメ世界では、すべてに選択肢が林立していて、選択肢することで空の色を変えたり、邪魔な電柱を取り除いたり、女性の鼻を高くしたり、何でもできる。自分の思い通りにできる。でもそういう思い通りは快適なのだろうか。

逆にいうと自分の思い通りにしかできないことは、自分の思いだ

けに閉じ込められるということになる。自分の思い通りが突っ走った結果は、自分が自分の壁の中に閉じ込められて、外気は遮断されて、そのままでは一酸化炭素中毒となってしまう。

デジカメと従来のフィルムカメラを比べるとよくわかる。フィルムカメラだって、最近のは自動露出のオートフォーカスで、じつに便利で有能である。選択ボタンだって、たくさんついてしまっている。でも電柱は消せないし、女性の鼻も高くできない。道具としての機能の基盤は、あくまで対象物をそのまま受け入れる機構に止まっている。

つまり思い通りという自分の壁があるにしても、その壁が低いのだ。だから思い通りにいかないところから、その低い壁を超えて運命が流入してくる。

ぼくなど、それこそが写真を撮る楽しみなのだ。思いも寄らぬ運命は、常にフィールドにある。自分の外の世界の、つまり複雑系の中にあるといってもいいのかもしれない。カメラは道具だから便利であるに越したことはないのだけど、その外気の中に漂う運命が掬えないものではしょうがない。

デジカメ→パソコンという世界は、そういう運命への防御装置で成り立っている。だから仕事の道具としては有能である。でも人間の思い通りにできる装置は、思いがけないものの到来が封じられていることでもある。自分にとっていちばん面白いのは、思いもしないものに合うことだ。自分の思いを超えたものにめぐり合うことである。何故それが面白いのかといえば、そのことで自分が広がっていく快感があるからである。

(赤瀬川原平「選択肢という言葉が嫌な理由」による)



現代は退屈が極端に嫌がられている時代だ。若者たちは、スケジュール帳が空白にならないように、さして重要でもない用事をたくさん入れてるし、そうでなければ「何か面白いことないの」と呟っている。世の親も子どもに退屈させるのは悪いことだと考えているのか、子どもをほとんど毎日、塾やお稽古ごとに行かせている人もいるという。

退屈を嫌悪するそうした欲求に応えようと、退屈を紛らわせるための刺激が世の中に満ちている。

(中略)

こうしたネットやゲームのように、絶え間なく、それも簡単に刺激を与えてくれるものが、いままでの日常生活の中にあつただろうか。現実の子どもたちは、歴史上かつてなかったほど、強烈な刺激に囲まれた状態で生きているのだ。

私は、外からの強烈な刺激で脳を興奮させるのではなく、刺激の少ない状況でも自分の脳を満足させる能力をつけるべきだと思う。すなわち退屈の中から、何か満足感を自分で生み出す力、「退屈力」をつけようということだ。

私は若い頃から、英国の哲学者バートランド・ラッセルに私淑してきた。ラッセルは一九三〇年に書いた著書『幸福論』の中で、「退屈と興奮」という章をもうけ、「退屈は、有史時代を通じて大きな原動力の一つであつたし、とりわけ現代においてそうである」と説いた。そして、次のようにも書いています。

「多少とも単調な生活に耐える能力は、幼年時代に獲得すべきである。この点で、現代の親たちは大いに責任がある。彼らは子どもたちに、シヨードの、おいしい食物だのといった消極的な娯楽をたくさん与えすぎている」

ラッセルは現代の子どもたちが置かれている環境をみたら驚くにちがいない。ゲームやネットなど、外からの強烈な刺激が子どもの周囲に氾濫しているのだ。このように退屈することを許さない

環境は、子どもにどのような影響を与えてしまうのだろうか。退屈が生み出したものを考えるとき、とても参考になるエピソードがある。「ドラえもん」の藤子不二雄Aが自伝的作品『まんが道』で描いた、二人が少年の頃の話だ。

昭和二十年代の前半、富山県の高岡に住んでいた二人は、いつも大好きなマンガについて語りあっていた。しかし終戦直後にマンガ雑誌など簡単に入手できるわけではない。そこで二人は、古本屋で入手したものを参考に、自分たちで雑誌をつくることにした。これが現代のように、いくつもの雑誌があつて、毎日、マンガを読んでいたとしたら、自分たちで描こうとは思わなかっただろう。退屈を創造の原動力にした格好の例である。

「幼年時代の喜びは、主として、子どもが多少の努力と創意工夫によつて、自分の環境から引き出すようなものでなければならぬ」ラッセルもこのように書いています。

この例を日本文化の視点から見ると、藤子不二雄には想像力をかきたてるための時間、つまり精神の「ため」を作る時間がたっぷりあつたといえる。この「ため」という言葉は、もともと「腰のため」のように身体に関する表現で、それが転じて「力をためる」「思いをためる」など、前向きな精神状態をあらわしていた。ところが今や、「疲れをためる」「ストレスをためる」など、心身が悪い状態をあらわすようになっていく。精神的な「ため」を積極的につくるという技術が、日本人から次第に失われていくうちに、言葉の意味合いまで変わってしまったのだ。

(齋藤孝「子どもに『退屈力』をつけよ」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

なぜ人は理解を求めるのであろうか。これは、進化の歴史において人間がきまった生活様式をもたず、それ故に逆にさまざまな環境に住みつき生活できたことと関連があると思われる。特定の生活様式をもっていれば、それで適応しやすい環境を選んで住みつき、そこで所与の情報を処理するだけでこと足りる。しかしそうした特定の生活様式をもたないときは、将来出会うさまざまな環境条件、おこりうる種々の環境の変化に対処しうるような、一般的な準備をしておくことがどうしても必要になる。

ある手続きによって今好む結果を手に入れることができたとしても、それだけでは、その手続きがどの範囲で有効なのかわからない。環境条件の些細な変化によって好む結果が得られなくなってしまうというのでは、あまりにも不安定である。これに対して、その手続きが「いかにして」「なぜ」うまく働くのかがわかっていれば、条件が変わったときには、手続きを柔軟に修正することができらるだろう。

また将来、予見することのできない課題に出会ったときにも、そこに含まれる対象物をよく理解していれば、適切な手続き的知識を生み出すことも、それほど難しくないにちがいない。

このように考えてみると、理解というのは、いわば、いろいろな環境条件（の変化）の可能性に備えて、あらかじめ一般的な準備をしておくことと見ることができるとはあるまいか。理解しておくことが人間にとって適応上必要な意味をここに求めることができよう。予想に反した事象に出会ったとき、あるいは、どれが真実なのかよくわからないとき、一応わかるがピタツとわかったという感じがもてないとき、知的好奇心がひき起こされる。この知的好奇心のひき起こされた状態とは、ことばを変えれば、理解がまだ十分に達成されていないことをわれわれが感じとった状態だといえよう。このときわれわれは、今のところうまくやっていっているが、将来にわたってこの状態を維持できるかどうかかわからない、と告げられていることになる。そこでできるかぎり他の課題に優先させて、理解を達成しよう（知的好奇心を充足させよう）とするのである。

当面の課題の達成をめざすことが現在志向（あるいは特定化された近い将来志向）だとすれば、理解をめざすことは、特定化されない遠い将来志向だといえよう。そして人間は、そのような将来志向

の強い動物なのではないだろうか。もちろん、だからといって現在のさまざまな理解活動において、その都度「これは将来のためだ」と意識しているわけではない。むしろこの活動に際しては、わかることそのものが楽しいから、自分なりに納得できるのはうれしいことだから、それに従事している、というにすぎない。それが結果として将来の適応に役立つのだ、と考えるべきであろう。

ここでひとつことわっておきたい。人間が知的好奇心が強く、深く理解することを求めている、といっても、いつでも、どのようなときでも、そうなのではない。例えば、四歳から九歳の子どもたちには、種々の積木を与え、「平均台（支点）」の上に置いてバランスをとるように求めた実験をみてみよう。年長の子どもやこの事態に慣れた子どもは、積み木の中央を平均台の上に乗せるとバランスがとれるという「理論」を持ち、これを試そうとしていた。

ここで注目すべきなのは、これらの子どもが、とりあえずはこの課題ができるようになっていた、すなわち、試行錯誤的に何とかつりあいをとって積木を置くことができたことである。どうやったら課題を達成できるかまったくわからない、いいかえれば全精力を当面の課題の達成に使わざるを得ないあいだは、理論検証つまり理解への試みは見られなかったのだ。ひとまず課題を達成できたという心的余裕があったからこそ、この解決法をより広い文脈において内省してみようとしたのだと考えられる。

現在の課題の達成のために手もちの心的エネルギーないし情報処理能力を使いきっている状態では、とてもこうした理解の達成のほうにまでその力をふり向けられないであろう。いいかえれば、理解をともなう学習には時間がかかるのである。時間に追われ、多くのことを速やかに処理しなければならぬ場合には、とても深い理解など達成できない。ここであげた事例が、他からの強制がないだけでなく、自分の好むやり方で、好むだけの時間取り組める事態で生じたものであったことを、もう一度注意しておこう。知的好奇心にもとづく学び手の能動性は、外側からせきたてられないかぎりにおいて発揮されうるのである。

（稲垣佳世子・波多野誼余夫『人はいかに学ぶか 日常的認知の世界』による。一部改変）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

ある日のこと、日本の明治維新が成功した理由の一つは、それまでの二世紀半にも及ぶ、対外関係に精力を取られることのなかった鎖国のおかげで、日本人は国内の社会基盤の整備、治山治水、農地の拡大、そして官僚制度の確立といったことに専念することができたため、近代化への準備が一応整っていたからではないか、という話になつて、歴史の専門家でもない私が、乏しい知識を総動員して、一生懸命説明に及んだのです。

ところがよく知っていることが、英語としてうまく出てこないのです。参勤交代、お国詰め、譜代、外様、天領、お国替え、そして駕籠や関所といった、何でもない徳川時代についての日本語が、すつと右から左へ英語になつて口から出てゆかないのです。

よく知らないことが言えないのなら当たり前でしょう。しかし自分としてはよく知っている日本のことが、さっぱり英語にならないというこの苦い経験は、私にとつて、それまであまり気にもしなかったいろいろなことを、深く考えさせるきっかけとなりました。

じつはそのときまで私は自分の英語力に、かなりの自信をもっていたのです。しかしそれは考えてみると洋書をたくさん読み、西洋のことを長い間いろいろ勉強した結果として、西洋に関するのならば一通り英語で考えたり、口に出して言ったりすることができるといふことに過ぎなかったのです。日本の歴史や文化、そして平素日本で見聞きするさまざまな事柄を英語で言い表わすという、日本人としての自己表現の訓練はまったく受けてこなかったし、また自分である気もなかったため、日本人のくせに、いざこちらの問題を英語でちゃんと話す必要に迫られたとき、あわてるはめになったのです。

このように外国の事情を知り、外国から何かを学ぶ目的で、もっぱら国内向けに学校で学んだ、情報の受信解読専用の英語力では、逆に外国に向かつて、自分の考えや日本の事情を説明し、相手を納得させるといふ、外向きの発信は必ずしもうまくゆかないのです。

(中略)

日本のことを詳しく知りたいという気持ちも、またその必要も外国にはありませんでした。このような時代に、日本人が苦勞して、日本の事情や歴史・文化などを、欧米のことばで海外に発信することは、殆ど意味がなかったのです。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

しかも近代の日本には、外国人の好奇心の対象となるような変わった風俗習慣や、珍奇な美術品として高く評価された浮世絵、陶磁器、甲冑刀剣のようなものはたくさんあつても、西欧の人々がぜひ知りたい、何としても手に入れたいと思うような、高度の科学技術や進んだ学問はまだありませんでした。

したがつて諸外国が現在のようにな、日本についての言語情報を積極的に求め、日本人の発言の乏しさを嘆き、不満をもらすといった状況ではまづたくなかつたのです。こんな時代に、もし日本の学校で英語を始めとするヨーロッパ語を学ぶ際に、日本固有の文化や日本独自の事物や事柄を、外国語で何と表現したらよいのか、日本の江戸文学をフランス人に理解させるために、どんな言語上の工夫が必要かなどと、もっぱら日本からの情報を海外に向けて発信することに力を注いでいたならば、まず日本は西洋に追いつくことなどできないばかりか、国家としての独立を保つことさえも、果たして可能であつたかあやしいものです。

しかし日本と世界の関係が一変した現在こそ、今度はいま述べたようなことに、全力をつくす必要があるのです。何しろ国内的にも、いまのように極度に大衆化し平均化した、日本の数ある大学に籍をおく、何百万という学生の一人一人が、自分で直接外国語を通して日本に取りいれなければならない大事な技術や新しい情報など、欧米とあらゆる格差が解消した現在、もう殆どないわけです。むしろ学生たちは将来社会に出たとき、国の内外において外国の人から求められた際に、自分のこと日本のことを、外国語で思いきり話したり書いたりできなくては困る時代になつていくのです。いやそれどころか、むしろ自分の方から積極的に機会をねらつて、進んで日本の良さ、素晴らしさを宣伝する必要さえもあるのです。

(鈴木孝夫『日本人はなぜ英語ができないか』より)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

このような独特の神秘を宿した量子力学の登場は、孤立した文化現象ではない。それは、同時代の他の文化現象・社会現象と緊密に連動している。たとえば、それは、二〇世紀初頭の芸術の革新運動と、同じ「精神」を共有している。

量子力学では、「可能性」が、主観的な内面の現象ではなく、客観的な現実性をもつ。例えば、今、「光子が右の孔を通過する確率が五〇%、左の孔を通過する確率が五〇%だ」という言明がなされているとしよう。「可能性」ということについての伝統的な理解に従えば、この言明は、次のように解釈される。すなわち、「光子は客観的には右か左かのいずれかの孔を通過するのだが、われわれの知りえた情報が多分であつたがために、光子の未来の経路について十分な確信をもつて予知できない」と。だが、量子力学が含意しているのは、こういうことではない。「五〇%右、五〇%左」という状態に、ある種の「客観的な実在性」があると考えねばならないのだ。先に、「単一の光子が自己分裂して二つの孔を同時に通過している」と述べたときに意味しているのは、このことである。

量子力学のこうした特徴を考慮したとき、われわれは、量子力学と（音楽における）「十二音技法」との類似性を看取することができる。シェーンベルクの十二音技法とは、一定の規則に従うことで、一オクターヴに含まれる十二音を完全に平等に使用とする技法である。この技法に基づく作品は、——優遇される特定の中心音をもたないために——完全に無調になる。逆に言えば、それは、可能なすべての調性が、そこから派生する母胎である。つまり、十二音技法は、（調性の）可能性そのものを現実性として提起し、作品化しようとする試みなのである。それが、成功したかどうかの判断は、難しいが、二〇世紀初頭の芸術様式と量子力学との対応ということに関して、より興味深いのは、美術の領域である。ピカソ等によって用いられたキュビズムこそ、美術の世界における、量子力学の相関物である。キュビズムとは、対象を、幾何学的な切子面に分解し、それを再構成するようにして描く技法だ。キュビズムの核心的な特徴は、対象が、多面から同時に把握されていることである。だから、キュビズムの作品は、様々な方向を向いた多数の平面の組み合わせ

のように描かれるのである。複数の平面は、複数の視点に対応している。それぞれの（仮想的な）平面に正対する位置に、一つずつ視点が配されていることになる。キュビズムが完成するのは、一九一〇年代のピカソの作品においてであろう。これは、量子力学が芽吹いてくる時期に対応している。さらに、キュビズムをキュビズムたらしめている特徴が多視点性にあるとすれば、「最初の二〇世紀絵画」と評される「アヴィニヨンの娘たち」において、すでにキュビズムはスタートを切つていと言つてもよい。この作品が描かれたのは、特殊相対性理論が発表されてから二年の後であつた。

多視点的なキュビズムの登場によつて、長きにわたつて西洋絵画を支配してきた規範——線遠近法——が、息の根を止められる。線遠近法は、空間を均質的なものとして捉える超越的な視点を前提にしていた。ニュートン物理学もまた、これとまったく同じ視点を前提にしている。それでは、キュビズムが量子力学に対応している、というのはどういう意味であろうか？ キュビズムは、対象を同時に把握する、複数の異なる視点を前提にしている。すなわち、それは、多数の認知する視点、多数の知る視点を共存させているのである。ところで、量子力学においても、「（対象における）知」は、常に、複数の（二つの）場所に分裂し、同時に帰属する形で与えられる。単一の超越的な視点を崩壊させる、こうした視点の多数性に関して、量子力学とキュビズムは共通しているのである。

（大澤真幸「「とき」の思考」に基づく）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

日本語では、自分の益となる行動を相手におこさせようとする場合、相手の行動を尊敬語で表現するよりも、それによって自分は恩恵を受けるのだということ表現すること、すなわち「うていただく」や「うてくださる」あるいは「うてもらう」を付ける方が、はるかに相手に丁寧に接していることが表現されます。

「うてくださる」は自分が恩恵の受け手のときの表現ですが、逆に恩恵の与え手のときは「うてさしあげる」となります。では、この表現は実際に使えるでしょうか。

たとえば、重い荷物を持つている人を助ける場合、「持つてさしあげましょうか?」は使えそうです。しかし、どこか恩着せがましさが感じられます。相手が会社の上司の場合はさらにそのニュアンスが出てしまい一層使いにくいのではないのでしょうか。むしろ「持ちましようか。」の方がいいくらいです。

こうした「やりもらい」の表現は、日本語において敬語と同様に、あるいは場合によっては敬語以上に、相手に対する配慮の表現として機能しているようです。

相手に対する配慮として機能している表現は他にもありそうです。たとえば会社で、コピーを取つてきてくれるよう頼む場合を考えて見ましょう。それを仕事のひとつとしてしている人に対してであれば「コピーとつてきて。」と単刀直入に言うかもしませんが、そうでない人に頼む場合は、「ちよつと今忙しくてさ、悪いんだけど、コピーとつてきてくれないかな?」のように、理由を述べたり、詫言を言ったり、文末を相手の可否を問う表現にすることを日常的に行つています。考えてみればこれらも、相手に対する配慮を言葉で表わしたものとと言えます。

相手から善意で何かを勧められてそれを断るといふことは日常よくあります。そのようなとき、「結構です。」とか「いりません。」のようにはつきり言うことを避けて、「あつ、でも、ちよつと……。」のように、断りの核心にあたる部分はあえて言わずあいまいにぼかすことを私たちはよく行つています。相手との関係を考慮してのことです。

その一方で、相手から重要なことを頼まれてそれを断るような場合は、「あつ、でも、ちよつと……。」のようなあいまいな言い方

だと相手に十分意思が伝わらずかえって迷惑をかけることがあります。ため、「あつ、でも、○○なので、申し訳ないんですが、ちよつと無理です。」のようにあいまいでない言い方をするのもよくあります。

同じ「断る」という状況でも、はつきり言わないことが相手への配慮である場合と、はつきり言うことが相手への配慮である場合とがあるようです。

このように、相手に対する配慮は、敬語だけでなく、いろいろな表現によつて実現されています。

もつとも、これらには共通する特徴も認められるようです。一言で言えば「相手を尊重する」「相手をたてる」ということです。「敬意」と言い換えてもいいかもしれません。

ところが、それらとは根本的に異なる発想に基づく「配慮」もありそうです。それは、「相手に近づく配慮」「フレンドリーになる配慮」とでも言える配慮です。

若者がよく使うタイプの表現に「話とかしたよ。」「ダメみたいなこと言われて。」のようなあいまいな表現があります。これらは、仲間うちの言葉として、相手との心理的距離を縮めたり会話を促進する機能を持つていふと言えます。距離を置かない親密な関係を築いたり確認したりするといふ配慮で使われている表現と言えます。「敬意」というよりも、もつと広い概念である「配慮」と呼ぶのがふさわしい表現のひとつです。最近よく聞かれる「いいつすよ。」のような表現も、「一応「です」を付けて敬意を表す一方で、「です」を「つす」と崩すことで相手に少し接近するわけです。近づくことの配慮が現れた表現のひとつと言えます。

(『国語研の窓』掲載の尾崎喜光の文章に基づく)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

この連載の問題設定である「思考の補助線」というタイトルには、その構想時において、ある危機意識が込められていた。

現代の知が図らずも断片化してしまっており、そのばらばらの破片をかき集めてみても、世界の像が一つに結ばない。そのような現状に対する個人的なあせりと悲しみのようなものを引き受けたうえで、

じっくりと考えてみたいと連載を始めたときに思っていた。

一見、関係のないように見える分野の間に、補助線を引いてみた

い。その補助線を引かなければ見えない新しい世界像、全体として浮かび上がってくるあるイメージを把握してみたい。そのような少なくとも私にとっては切実な思いが託されていた。

下手をすれば、ある分野の卓越した専門家であることを維持することですら可処分時間と自己のエネルギーのすべてを費やしても難しい、という時代である。自分の専門である脳科学においては、すでに

そのような傾向があることを身近な問題としてよく知っている。同じ脳を研究しているはずなのに、視覚の専門家は前頭葉の統合過程を知らず、海馬における学習理論の研究者はシナプスの可塑性の分子メカニズムを知らない。そのような事態はすでに進行してしまっている。

想像するしかないが、歴史学でも、経済学でも、あるいは文学研究でも似たような事態が進んでいるのだろう。万葉の専門家は江戸時代の戯作者のことなどつゆ知らず、というのは当たり前のことなのかもしれないが、それでは満足できないという寂しい思いは誰の胸の中にもあるのではないか。

知の全体を見渡すことはもはや不可能なのだろうか？ 一人ひとりの人間は人類全体が運営している「エクスパート・システム」の部品として、あるいは「グーグル」で検索されるべき知のアーカイブの部

分担当者として、その職分を全うすることしかできないのだろうか？

検索エンジンの前には、文系の知も理系の知もコンピュータのハードディスク上のデジタル・ビットにすぎない。それは、奇妙に私

たちの魂を自由にする光景ではあるが、一方ではとてつもない

脱力へと誘う事態でもある。そもそも、検索エンジンは世界全体

どころか一つひとつの事物を引き受けることにすら、資することができないのだ。

知のサブカル化（＝部分問題の解法ないしはレトリックとしてのみ知に取り組み、所有し、発信するということ）がポスト・モダンニズムなど取り立てて参照するまでもなく進行してしまった現代において、知の断片化の現状を突き抜けるためにはよほどの覚悟と戦略が要る。そんな志向性はもはやポスト・デジタルの人類にとつて余計なものではないのかもしれないが、それでも志向することだけは止めたくない。

アインシュタインは、「感動することを止めてしまった人は、死んでしまったのと同じである」という意味の言葉を残している。断片化した知をそのまま受け入れて、疑問を持たずにただ右往左往する人類はもはや本当は生きていないのではないか。

そもそも世界全体を引き受ける、ということは、一体どのようなことなのだろうか？

世界に関する人間の知を集約としてその要素を書きならべてみることもできる。そして、その全体を同時に把握することを目指す、という考え方もある。そうだとすれば、やるべきことは、知の巨人、博覧強記の人への道をたどることだろう。諸学の書物に通曉し、さまざま分野の最新の知見を網羅的に横断してみせる。そのような胆力のある人間は一つの理想像であるかもしれないし、また実際に過去にはそのような取り組みもあった。ゲーテやダ・ヴィンチ、南方熊楠のように、ある程度成功したと思われるような実例もある。

現代の知的状況の本質的問題点は、そのような百家全書派的な野望の実現が原理的に不可能だということが誰の目にも明らかだという点にある。たった一つの分野を取り上げてみたとしても、出版される論文、本の数は膨大である。どれほど卓越した記憶力と思考能力に恵まれた人間でも、現代の知の諸分野を一人でカバーすることなどありえない。

（茂木健一郎「思考の補助線」より）



読解問題 1月4週分

問1 読解マラソン集1番の長文「教師の指示もなしに」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A アメリカの小学校では、児童は自分の判断で号令をかける
B 日本の小学生は、教師の指示がなくても自分の判断で行動する
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番の長文「教師の指示もなしに」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 日本の小学校では、先生が最終的な判断の権限を持っている
B アメリカの小学校では、ボランティアなど授業外の小集団活動が盛んである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番の長文「『まち』とは自分たちが住み」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 日本の「まち」は、自然のままに発展し成長してきた
B 日本人には、美的感覚はあるが、「まち」についての意識がない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番の長文「『まち』とは自分たちが住み」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 日本の公的機関はタテワリ組織なので、建築教育も周囲との関係を考えることを教えていない
B 一つの建築物を作るときでも、周囲との関係を考えれば整った「まち」ができる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番の長文「かつて、『若者の活字離れ』と」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 昔の若者は難解な思想書を読んでいたが、現代の若者の多くは活字から遠ざかっている
B これまでの活字文化は、活字以外の知性を吸収しようとしてこなかった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番の長文「かつて、『若者の活字離れ』と」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A ムラの住人たちがこぼす「寂しくなった」という愚痴は、「若者の活字離れ」というレッテルと同じである
B 活字離れは、活字文化が活字以外の文化との接点を見出すことによって更に広がった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番の長文「アイヌの世界観において」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 熊が土産を持った客人であるという考えは、キリスト教の人間はすべての動物を支配する権利を持つという考えと同じような勝手な考えである
B 熊が客人であり土産の肉を食べることが天国に帰すことだと考えるのは、人間が主で動物が従であるとする考えである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番の長文「アイヌの世界観において」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A キリスト教の論理では、動植物を殺しても良心の呵責は感じないで済む
B アイヌ語で「ありがとう」という言葉は、「私を殺してくれ」という意味である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 2月4週分

問1 読解マラソン集5番「人間社会は『同じ』を繰り返すことで」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「本日の交通事故、死者一名」に、性別・年齢・職業などを示しても、「違い」に近づいたことにはならない。

B 「違い」は感覚に属し、「同じ」は意識に属している。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「人間社会は『同じ』を繰り返すことで」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「同じ」世界を「上に上ろうと」するという意味は、概念を抽象化することである。

B 一期一会とは、「違う」世界を見ようとする発想である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「デジカメ→パソコンという世界には」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 自由な選択肢が増えることで、社会は進歩し、個人の幸福は拡大する。

B 自分の思いどおりにできる機械によって、人間がかえって自分の思いの枠を超えられなくなることがある。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「デジカメ→パソコンという世界には」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A カメラの機能が少ないと、その分思いがけない運命に出合うチャンスが減る。

B 自分を越えたものとめぐり合うことによって、自分が広がる快感を持てる。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「現代は退屈が極端に」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 現代の大人は退屈な時間を避けようとしているが、子供にとって退屈な時間はない。

B 退屈力とは、刺激の少ない状況でも自分の脳を満足させる能力である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「現代は退屈が極端に」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 藤子不二雄は、少年のころ、マンガ雑誌が簡単に手に入らないので、自分たちでマンガを書いた。

B 人間は、退屈を克服しようとして社会と自分自身を進歩させてきた。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「なぜ人は理解を求めるのであろうか」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 理解する能力は、進化の歴史において役立ってきた。

B 環境条件の変化する可能性が高いほど理解力が役に立つ。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「なぜ人は理解を求めるのであろうか」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 知的好奇心が引き起こされるのは、理解が不十分だと感じるからだ。

B 理解力を高めるためには、時間内に多くのことを速やかに処理する課題を課すことだ。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 3月4週分

- 問1 読解マラソン集9番「ある日のこと、日本の明治維新が」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■外国から何かを学ぶことが目的で英語の勉強をしていたので、日本の歴史や文化を言い表すことが苦手だった。
1 ○ 2 ×
- 問2 読解マラソン集9番「ある日のこと、日本の明治維新が」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■明治時代のころから、情報発信を中心とする英語教育をしていたら、日本の社会はもっと発展していたはずだ。
1 ○ 2 ×
- 問3 読解マラソン集10番「このような独特の神秘を宿した量子力学の登場は」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■量子力学で「可能性が五〇%だ」というのは、量子の世界は小さすぎて測定が不十分になるからである。
1 ○ 2 ×
- 問4 読解マラソン集10番「このような独特の神秘を宿した量子力学の登場は」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■遠近法は一つの視点を前提にしているが、キュビズムは同時の多数の視点を前提にしている。
1 ○ 2 ×
- 問5 読解マラソン集11番「日本語では、自分の益となる行動を」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■目上の人が重い荷物を持っているのを助ける場合、「持ってさしあげましょうか」の方が「持ちましょうか」よりも正しい。
1 ○ 2 ×
- 問6 読解マラソン集11番「日本語では、自分の益となる行動を」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■若者がよく使う「ダメみたいなこと言われて」は、若者が正しい敬語の表現を学んでいない結果生まれる。
1 ○ 2 ×
- 問7 読解マラソン集12番「この連載の問題設定である」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■現代の知は専門の分野ごとに分かれてしまい、全体を見通すことはますます困難になっている。
1 ○ 2 ×
- 問8 読解マラソン集12番「この連載の問題設定である」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■現代において知の全体像を把握するためには、博覧強記に頼るしかない。
1 ○ 2 ×

1 ~ 3 月

小1 コード：nane パ ス： PDF	小2 コード：nane パ ス： PDF	小3 コード：nane パ ス： PDF
小4 コード：nane パ ス： PDF	小5 コード：nane パ ス： PDF	小6 コード：nane パ ス： PDF
中1 コード：nane パ ス： PDF	中2 コード：nane パ ス： PDF	中3 コード：nane パ ス： PDF
高1 コード：nane パ ス： PDF	高2 コード：nane パ ス： PDF	高3 コード：nane パ ス： PDF